

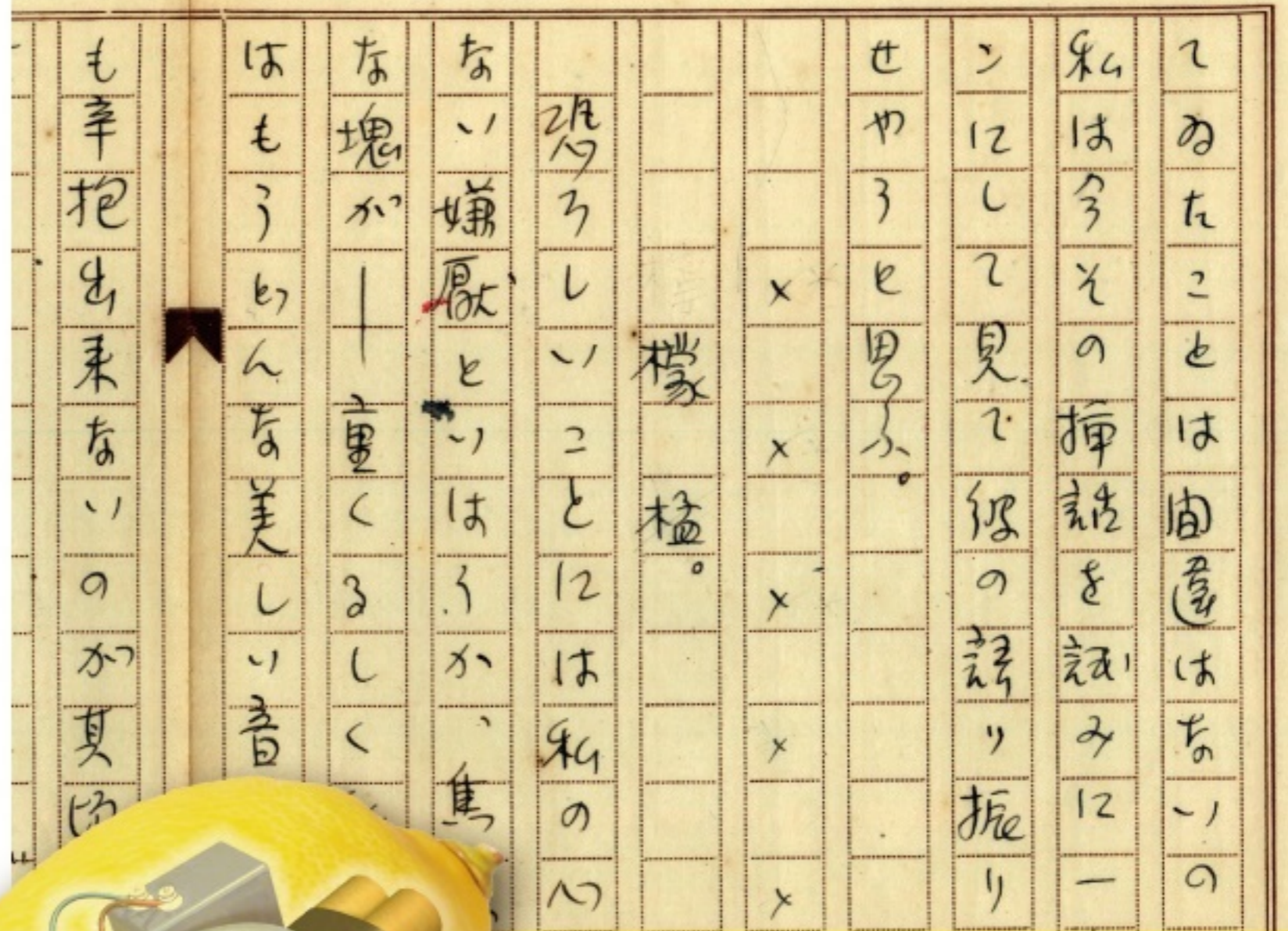
「源氏物語」の研究や数多くの皇室関連所蔵品など、京都とのゆかりが大変深い実践女子大学・実践女子大学短期大学部と京都市は、本年5月に事業連携・協力に関する協定を締結しました。本展はその協定に基づく最初の取組です。

京都市 × M丸善 × 実践女子大学共催

協力：おかげさまで創業百周年 武蔵野書院



昭和初期頃の丸善京都店(丸善雄松堂株式会社所蔵)



東京展

2019年
11/13 [水] ~
11/19 [火]

会場 丸善丸の内本店
1F入口横展示スペース

〒100-8203
東京都千代田区丸の内1-6-4
丸の内オアゾ内
営業時間内 09:00-21:00

京都展

11/23 [土] ~ 12/7 [土]

会場：丸善京都本店 B2催事会場

座談会：第1部 14:00~15:00
第2部 16:00~17:00 (同内容)

出演：棚田輝嘉 (実践女子大学教授)
河野龍也 (実践女子大学教授)

参加費：無料

定員：各部30名
(応募者多数の場合は抽選)

【京都展 座談会申込方法】

京都市いつでもコール ☎075-661-3755
にて、10/18より受付開始

展

梶井基次郎の京都

幻の「檸檬」草稿、丸善に見参!

時は大正。爆発しそうな青春の憂いを胸に秘めた高校生が一人、あてもなく京都の町をさまよっていた! レモンを一つ、丸善の書棚に残して去った彼は、何を考え、何を願ったのか。

一九二四年に執筆され、二〇一一年に現存が確認された幻の「檸檬」下書き稿(「瀬山の話」実践女子大学所蔵)を、東京・丸善丸の内本店と京都・丸善京都本店で展示します。京都展では座談会も開催します。

数少ない梶井の本物の筆跡が見られるこの機会に、ぜひお越しください。

丸善150周年・実践女子学園120周年・実践国文100年記念

関連グッズ情報

「梶井基次郎と“神隠し、の京都”展（東京展 11月13日～）開催に合わせて、『檸檬』ゆかりの武蔵野書院（創業100年）より、梶井基次郎「『檸檬』を含む草稿群（瀬山の話）」の上製カラー複製本および普及版が刊行されます！会場でぜひお手に取ってみてください！

§ 執筆者 §

栗原 敦（実践女子大学名誉教授）／棚田輝嘉（実践女子大学教授）／河野龍也（実践女子大学教授）

§ 内容抜粋 §

●はじめに

ここに出現した「『檸檬』を含む草稿群」を前にして、迫り来る表現者としての梶井基次郎の営みの様々、いわば表現者の沈思し、乱れ、制御し、破裂し、また集約するといった、激しくもまた粘り強い作品生成の現場、苛烈にして、危機的ともいう他ない作家の（あるいは作家誕生の）生動する姿に打たれない者はいないのではないだろうか。…文学〈作品〉とは、通常、完成原稿として発表されたものを前提に思い描かれる。しかし、それは言語の本質、伝達の原理からいっても、実は表現としてそれを生み出した全ての過程によって形成されたものであって、背後に隠された全てを含んで読む者に働きかける生きた現象なのである。表現過程の全てによって〈作品〉は現象する。表現者の側に立った整理をすれば、この〈作品〉観は、表現者の「表現行為としての〈作品〉」とでもいうことができるが、私たちのもとにもたらされた「『檸檬』を含む草稿群」は、その最も刺激的なひとつに他ならない。「表現過程それ自体」を〈作品〉と捉える〈作品〉観を添えて、ここに本書をお届けするゆえんである。（栗原 敦）

●「『檸檬』を含む草稿群」について

まさか現物にお目にかかれるとは思っていなかった。おそらくは散逸してしまったであろうと、ほとんどあきらめていたのである。しかしひょんなことから本草稿の存在を知り、また本学で購入するという望外の機会に恵まれた。…やはり「実物」の力は想像以上だと言ってよい。「実物」には梶井の制作過程、つまり身体記録が残っている。また、淀野隆三による編集（翻刻）過程も明確に残されており、これはこれで十分興味深いものがある。…今後、この作品の本文並びに内容研究は、本書の写真版を抜きにして研究できないだろうと思う。そういう意味では、本書を今後の梶井研究にぜひ役立てていただきたいと思う。（棚田 輝嘉）

●「檸檬」の忘れ物—その秘められた起爆力について

梶井基次郎の「檸檬」は、近代文学史上屈指の青春文学として愛読され続けている。自らを変えたくても変えられない、身もだえするような日々。誰もが経験するそうした時代の狂気や陶酔を封じ込めたこの作品は、読む者の中に何か身につまされるような厳粛さと気恥ずかしさとを掻き立てる。この共感のうちには、作者梶井基次郎が、三十一歳の若さでこの世を去ったことも響いているだろう。職業作家ではない“永遠の文学青年、の文学として、その未熟さ、不安定さの中には、円熟や完成には求めることのできない無限の可能性が閃いている。（河野 龍也）